

セル看護提供方式を導入し業務改善に向けた取り組みの成果
～看護業務の「ムダ」を取り除き業務効率を最大化する～
緩和ケア病棟 ○竹下万祐子 小屋松華織 國松真由美

【目的】緩和ケア病棟では、「患者が抱えるさまざまな苦痛を緩和し、その人らしく生きることを支える」を目標に掲げて看護を提供している。がん終末期における緩和ケアの特徴は、身体症状の緩和や精神面・スピリチュアル面のケアなど患者個々に応じた細やかな対応に時間が割かれることが多い。昨年度の病床稼働率は87%（令和2年66%, 4年77%）と年々上昇傾向も看護要員は前年比-1.2名となっている。また平均時間外は月10.6時間、月平均時間外の最高値は17時間、個人では34時間という結果であった。業務繁忙は、スタッフの疲弊や離職、医療事故の要因に繋がる場合や、充実した看護の提供への障壁になるなどの意見も聞かれ、業務改善の必要性を感じた。今回、3つのムダ（導線・配置・記録のムダ）を省くセル看護提供方式を用い、看護業務のムダを洗い出し、業務効率を最大化することで、看護の質維持、向上を目指しつつ、時間外労働削減に繋がらないかと考え取り組みを行った。

【方法】看護業務のムダを洗い出し、以下の改善策を病棟看護師13名で共有し、9月から3か月間実践した。電子カルテの指示確認や必要物品を取りに何度もナースステーションと病室を往復する時間や、スタッフを探す時間である「導線のムダ」に対し、カートの屋台化、収納棚の追加配置、PHSの有効活用を行った。導線に関しては距離を測定し時間換算した。「配置のムダ」は、重症度やプライマリ中心のランダムな部屋割から、担当部屋が直線上で把握できるブロック割とした。看護師2名で移動可能なスライディングボード活用による入浴介助も導入した。「記録のムダ」は、カートの屋台化によりリアルタイムなカルテ記録、経過表の観察項目や定型文の活用を行うことで重複した記録にならないようにした。

取り組み3か月経過後、スタッフ対象に現状評価のアンケート調査を行った。アンケートは多肢選択および自由記載で行い、多肢選択については単純集計し、自由記載は質的に分析した。

【結果】アンケートの回収率は100%であった。「導線のムダ」では、カートの屋台化は有効であった(85%)、収納棚の追加配置が有効であった(62%)、PHSを有効に活用できた(92%)であった。主な理由は往復時間やスタッフを探す時間の短縮だった。各項目で有効活用できなかった理由として、カートに設置したボードの使いづらさ、もともと事前準備をしていたので有効性を感じない等だった。「配置のムダ」では54%がブロック割は有効だったと回答し、理由は病室間が近くなり往復時間短縮になったが66%であった。有効でない(46%)と答えた内容としては、ブロック毎で業務量の偏りがあるであった。スライディングボード活用は有効であると100%が回答した。「記録のムダ」では電子カルテをカート上に設置したことに対し100%が良かったと回答し、タイムリーな指示確認や記録が出来たことで効率化を感じていた。しかし経過表活用による経時記録の簡素化については効果を感じたのは46%であった。効果を感じてない(54%)理由に、これまでの習慣がなかなか改善できない、無駄に観察項目が増えたなどの意見であった。全体的な業務効率化については67%が時間短縮や効率化が図れたと回答した。効率化によって患者のそばで寄り添える時間も増えたという意見もあった。図れなかった(33%)理由としては、業務効率は図れても、患者のその日の状況によって看護業務の繁忙の違いや、スタッフの業務処理能力の差も影響してしまう意見であった。今後については73%がこれからも業務改善をしていきたいという結果だった。

【考察】今回の取り組み結果、業務効率化に繋がったと感じたスタッフが67%、これからも業務改善していきたい73%と改善に対する一定の成果は得られた。しかし施行期間の平均稼働率は87.1%、時間外平均は12.1時間と削減には至らなかった。業務効率を最大化しても、対象が患者家族であることから、先送りにできない内容も多いことが現状である。それでも今回の取り組みを継続したいと回答したスタッフが過半数であったことは、業務効率化によって、患者の傍で寄り添う時間が増え、患者の不安解消や安全にも繋がるなどの実感したからではないかと考える。今後も更なる業務改善を繰り返しながら病棟に合った看護方式を模索していきたいと考える。

【参考文献】須藤久美子、セル看護提供方式導入事例集、日総研

麻生泰、セル看護が医療現場を救う。日本経済新聞出版社